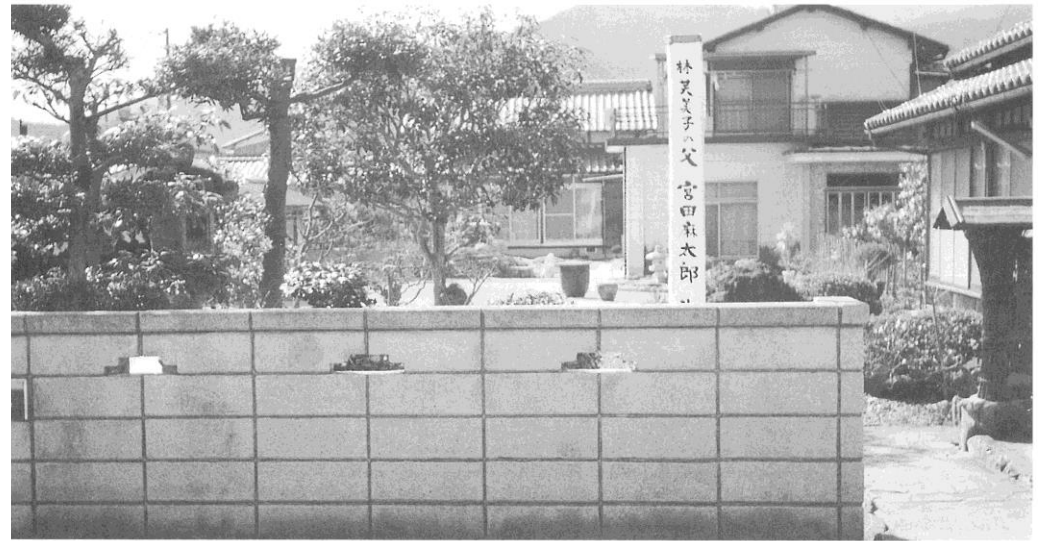




宮田麻太郎生家跡に建つ標柱

林芙美子の父・宮田麻太郎

●——特集
道前平野の歴史と文化

吉本 栄作

昭和を代表する女流作家に林芙美子がいる。芙美子の父・宮田麻太郎は東予市新町出身である。

一九九九年、麻太郎の生まれ育った東予市で、彫刻家・近藤哲夫氏を代表にまちおこしグループ「アトリエしまなみ」が結成された。麻太郎像を見つめ直すことから始め、郷土への愛着を生み、心豊かに生きていけるよう、文化面での新しい風を起こそうという願いからだった。

そこで東予市の麻太郎、芙美子ゆかりの地に標柱及び記念碑を設置していった。また麻太郎を知るため、麻太郎の長男、山口県在住の宮田衛さんに話を伺った。

「厳しくそして優しく男らしく頼りがいのある父です。そんな父が大好きでした。私は生まれながらにして体が弱く気が小さく何事にも積極性がなく迫力に欠けていました。この欠陥だらけの私を辛抱強く鍛えてくれたあの元氣であった

父の顔を懐かしく思い出します。いや、私の心に深く刻み込まれているのです。」

衛が生まれる一八年前、芙美子は生まれた。しかし、麻太郎は芙美子の母・林キクと同居しながらもキクそして芙美子も籍に入れなかった。

……麻太郎の父・惣助は元々裕福な農家に生まれたが、商才にたけ當時商店街として栄えた「新町」に「扇屋」という店を開く。「扇屋」は衣類を中心に蚊帳、下駄、紙などを取り扱う雑貨屋で繁盛していた。しかし、長男でもあるのに麻太郎はこの新町から飛び出した。今となって、新町という商店街が衰え始めたからか、両親とそりが合わなかったからか、判断しにくい。青年になった麻太郎は単身、九州へ渡った。そこでキクと運命の出会いをし、キク三三歳、麻太郎二二歳の時に生まれたのが芙美子である。やがて二人は下関で「軍人屋」という店を開き、麻太郎はますます商才に磨きかけた。

しかしキクにはすでに、私生児がいた。名家である宮田家にとって年齢が離れただけでなく、私生児の存在

は許すことの出来ないことだった。戦前に於て結婚は本人の問題というよりも両親及び家の問題であった面が強い、……。

六歳になった芙美子を母親・キクが引き取り、麻太郎とは別の生活をするようになる。その後、芙美子とのつながりはどうだったか。

「尾道時代に芙美子が女学校に行けたのも麻太郎が援助したと聞いている、……金銭的な面倒を見たのが、ほんとうのような気がする。」

『現代日本文学アルバム 林芙美子』一九二〇年、尾道市立高等女学校三年の夏、麻太郎のいた福岡県直方から同級生・木曾季野さんに葉書を出している。

『消印・七月二六日、八月七日』一九二二年、麻太郎の父・惣助葬儀の折、新町を訪れている。

『女学校出席調査票に 忌引き三日の記載』一九二四年、麻太郎に手紙を送る。この一文がJR壬生川駅入り口に記されている。

「……、体だけは元気です。ご安心下さいませ。何もかも忘れ、この



林芙美子が登った佐志久山には記念碑があり、地元の子どもたちも訪れる。



新町、新福寺北側の墓地にある宮田家幾代の墓

よほど印象深かったのだろう、衛はその時のことを今あったかのように話す。

「衛は家の焼け跡でしょんぼり立っている一人の老人と出会う。どうも父のようだった。」

「お父つつあん。」

と、三回叫んだ。やっと、振り向いた麻太郎が目を細め、立っている。そして突然、誰か分かりびつくりしたかのように、

「おおっ、衛か、……。」

そして、何かにとりつかれたように小屋の方へ急いで走った。

「おーい、母さん、……母さん。」

「何ですか、大きな声で、……。」

父をとがめるように出てきた秋生に向かって麻太郎は叫んだ。

「馬鹿！衛が、衛が、帰って来たんだぞ！」

と、久しぶりに「馬鹿」と怒鳴る麻太郎の声を聞いて、衛の頬からこぼれ落ちる涙は止まらなかった。

この時こそ、生きて帰って良かったと、述懐する。あの豪快な麻太郎が喜び一杯の涙を流したのを初めて見たのだ。そして無我夢中で麻太郎

よしと、えいさく 一九五九年、東予市生まれ。大阪教育大学卒業後、忘れ去られていく郷土の偉人、民話について脚本を書き、児童に劇を取り組ませる。その活動が評価され、四国TOYP大賞95優秀賞受賞。大河内清輝君をモデルとしたじめをなくす天才教材「怒りを胸に」制作。絵本「6ひきのかえる」「たぬき3兄弟」(新居浜市民ミュージカル)等の脚本を手がける。林美美子と父の愛をつつた「麻はん」(KTC中央出版)出版。

現在、アトリエしまなみ会員、喜左衛門狸の会会員、新居浜健康文化友の会会員。

に抱きついた。気がつくとも秋生が衛の背中に顔を当てて泣いていた、……。

それから、二ヶ月後、麻太郎は亡くなる。

「お父つつあん、……俺と二人でやり直そう、……。」

そんな衛の願いもむなしく、享年六四歳だった。」

現在、東予市新町新福寺の北側にある墓地にて永遠の眠りにについている。一九七九年、衛は麻太郎の兄弟の許しを得て、遺骨を分骨し、高杉晋作挙兵の地・「功山寺」の境内に隣接する地に墓を建立した。そして家族とともに毎月、墓参りをする。



野口 村とシゲヨさんと城ヶ島の雨を歌った吉岡小学校に建つ標柱

不幸な私を、父上は愛して下さるでせう——ご自愛を祈ります。……」

一九二九年、麻太郎のいる八幡市を訪れている。

「……、父にあふので胸が鳴ります。」

文章等に残されている以外に、交流があったと考えるのが自然でないか。

東予市でこんなことを耳にしたことがある。

惣助葬儀の折、東予市で美美子と一緒に歌を歌ったとされる野口シゲヨさん関係者の証言は微妙に違う。葬儀でない別の日、夏休みなど長期の滞在時に何度か美美子とともに歌を歌ったという。幼い頃の美美子と新町で会ったと祖母から聞いたと言う人もいる。しかし証言者が故人のため伝聞に過ぎない。

最後に麻太郎、その晩年について述べたい。

……一九四五年終戦で、宮田衛は八月一九日復員した。下関市は中心地が全焼、その頃、麻太郎は仮小屋で妻・秋生と生活していた。